

白山ふるさと文学賞

第四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

小学生高学年の部 最優秀賞

母の青いノート

北陽小学校六年

小間井 こまい

紗彩 さあや

「お母さんは、やっぱりすごい。」
そう思ったのは、去年の夏休みぐらいいったと思う。

ある日の朝、物音がして私は起きた。「こんな早朝に何をしているんだろ。」こんなことを思いながら、リビングに出て行った私の目に映ったのは、ノートに、何かを書きこんでいるお母さんの姿。そのノートは少しよれよれで、青い表紙が印象的だった。何を書いているのか気になったので、たずねてみたら、

「このノートには、薬の本ののついでいそうでのついでいなような説明の
コツとか、病気の診断に用いられる検査についての事などを、また見
返せるように、書きとめとるんやよ。」
と、教えてくれた。

母は、薬ざい師として、薬局で働いている。毎日、いそがしいらしく、とても、大変そうだ。それでも母は、私の知らないところで、ノートに書きとめて、一生けん命がんばっていたと考えると母への「あこがれ」の気持ちは、強くなっていた。

そんな母の、青いノートを今、改めて見せてもらった。中はやはり、文字がぎっしりで、より、使いこんでいるように見えた。書いている時、気づいたけれど、今でも同じ青いノートを母は使っている。一つの物を大切に使うところも、私が母をあこがれる理由の一つだ。

私は考えた。どうしたら母のようになれるのだろう。どちらかという
と、私は、めんどうくさがり屋であきらめが早いほうだと思う。そのせいで、よく母におこられてばかりだ。

例えば、算数のテストの時、よく、およその面積を求めましようという問題や、およその数を求めましようという問題がある。この問題でいつも私は、答えに「約」を付け忘れるというミスをしてしまう。何度も何度もまちがえて、直して、まちがえて、直してをくり返しているのに、やっぱりまちがえてしまう。でも、お母さんは、私のようにまちがえる、直すをくり返しているのではなく、二度とまちがえたり、忘れたりしな

いように、その青いノートに書きとめている。こんなことを考えていたら、今からでも、母のようになれるのではないか。もし、テストや授業で分からなかったことや、まちがえてしまったことがあれば、自学ノ
トで復習する。そうすれば、大人になったときにも役立つのではないか。そもそも、母はなぜ、ノートに書きとめておこうと思っただろうか。ただでさえ、薬ざい師は大変そうなのに、忘れないようにと思っただのには何かきっかけがあるのかもしれない。

母に聞いてみたらこう言っていた。薬ざい師として働き始めてから、忘れてはいけないことだらけだったらしい。同じ名前の病気でも、ちがう薬を使い分ける理由や薬の副作用など、はつとした時、いつも書きとめている。患者さんと話す時に、忘れてはいけないことだけれど、書いたものを何回も見ないと、またすぐに忘れてしまうそうだった。この話を聞いていただけで、薬ざい師という仕事は、やっぱり大変だと思った。

そんな、いつも仕事でいそがしい母。そういえば、私が学校から帰ってきた時、仕事で疲れているだろうに洗たくをしていたことを、今、思い出した。私だったら、「疲れている。」を理由に、洗たくなんかしようと思わないと思う。そう考えると、もっとお手伝いをしたほうがいいのかも思えないと思えてきた。お手伝いと言っても、私はふだん自分の洗たくされている物をダンスに片づけたり、たまにおかずをよそったり。そんな程度のことしかしていない。だから、少しでも母の力になれるように、洗たく物をたんだり、食器洗いをしたり、妹の宿題を見てあげたりとお手伝いをしようと思う。

それでも母は、今日も仕事と家事をこなしている。どんなに疲れていても、私と妹のことを一番に考えてくれている。母の青いノートは、私に気づかせてくれた。母は、仕事熱心で努力家だったこと。仕事は大変だけれど、家事もきちんとこなしていたこと。そんな母の子が私で何かほこらしい。だからこそ、母の思いを胸にがんばっていかうと思う。あこがれの母だから、私は母を応えんする。

私のお母さん。薬さい師のお母さん。仕事熱心なお母さん。家事をこ
なすお母さん。私のことをおこつてくれるお母さん。それでもやさしい
お母さん。宝物のように大切に大好きなお母さん。
「いつもありがとう。」

